

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介しています。執筆者は山田史談会長の佐藤仁志さん（豊間根・73）です。

下山清は、明治35（1902）年11月北海道北見国枝幸郡枝幸港で生まれた。生後3日で産婆の過失により失明するが、その後視力はやや回復した。同41年母ミエに連れられて郷里沼宮内に帰り、沼宮内小学校に入学。大正2（1913）年尋常科4年の時脳膜炎を病み、聴力と片

放浪の歌人

下山清と白土キク



中央公民館脇にある清の歌碑

の他界にあうという、不幸な少年期を過ごした。清は短歌を好みグループを結成し歌誌を発行、盛岡の歌人たちと交流を深めた。23歳のころ友人を看病して肺結核に感染した。家族（継母）と疎遠になり、沼宮内の家を出て盛岡、花巻、和賀、遠野と放浪の旅に出、友人知人の世話を受けた。昭和2年の春、山田町に

りもない病人の清を引き取って実母のように看病したが、清は盛岡赤十字病院の施療患者になつた。昭和5年6月、キクは盛岡に移り清の看護に努めたが、翌6年12月、清はキクに見守られながら29歳の短い生涯を終えた。清は独学で短歌と社会主義を学び小原節三（アララギ派歌人）と論戦。このときの論文は、社会主義的文学論として、本県で初めてのものであるといわれる。昭和4年3月、岩手日報学芸欄に連載された「幸福な病者」の中で、

清は「家財のすべてを失い、世人の誤解や嘲笑をともに浴びながらも、わたしのために尽くしてくれた白土キクさんこそ、わたしにとって慈母観音の化身でなくてなんだろうか」と述べている。

（1890）年北海道旭川に生まれた。父鉄之助は高村光雲の弟子で彫刻家。東京私立三輪田女学校卒業、東京私立哲学館大学師範科を卒業し、同38年旭川町役場勤務、大正4年旭川区役所勤務などを経て、同10年に両親の出身地山田町に移り住んだ。

清の短歌276首が有志により昭和6年8月歌集「わくら葉」として出版された。奥付には「定価35銭発行者白土喜久子」と記されている。

キクは、内職をしながら恵まれない人のために活動していた。彼女はどのゆか

町中央公民館脇の公園広場には「雪玉をつくる幼子 つけりやめて かちかむ指を 口に入れけり」と刻んだ歌碑がある。

町長室から

スポーツの秋到来。10月5日開催の町民体育祭は近年にない多くの参加者でにぎわい、熱戦を繰り広げました。結果は、豊間根チームが圧倒的な強さをみせて4年連続で優勝しました。今年はNHKの取材もあり、地区ごとの団結を競う伝統の大会が県下に報道されました。▼10日には「県中学校駅伝大会」で山田中学校女子チームが、春の「盛岡市内一周継走」に続き連勝し、昨年優勝した男子チームも11位と健闘して今や駅伝の実力校として定着しています。また、全国障害者スポーツ大会に県代表として出場した佐藤弘二君、中村明穂さん、吉田徹君が金銀、銅獲得の大健闘。厚生労働大臣杯マレットゴルフ全国大会では、豊間根の佐々木富美子さんが優勝と、うれしい報告が続きました。▼以上、世界同時株安、金融危機など景気の動向に暗い影をさす報道が多い昨今、明るい話題を提供しました。

山田町長 沼崎 喜一